

2015（平成27）年度 手書き実技試験問題（あらすじ）

テーマ「災害（帰宅困難者）」

佐藤／市民グループの代表の佐藤です。学習会の冒頭 10 分、簡単に話をする。私たちの会には、防災の専門家や大学の先生がいるわけではない。各地域の行政や自治体で取り組んでいるところはたくさんあると思うが、私たちは地域に暮らしている会社員、主婦、学生など素人の一市民として、自分たちの暮らしは自分たちで守ろうと、勉強会を重ね避難訓練などを続けている。

ところで、「帰宅困難者」という言葉をご存じか？「帰宅困難者」というのは、仕事や学校、買い物などで出かけているときに、地震など大きな災害が起き、帰宅が困難になった人のことを言う。電車は止まり、バスやタクシーも大渋滞で動かないなど、交通機関が使えない場合、家に帰れないという人が出てくる。一般的に 10 キロ以内は歩けると考え、10 キロから 1 キロ増えるごとに 10%の人が帰宅困難になる。11 キロだと 10%、12 キロだと 20%と増え、20 キロだと 100%。つまり、20 キロ以上の人は、すべて「帰宅困難」と判断する。

2011 年の東日本大震災のとき、私は横浜に住み、東京で仕事をしていた。震災の起こった日は、東京の職場にいた。距離にすると 30 キロ以上で、十分な帰宅困難距離だった。それでも家に帰らねばと思ったのは、自宅に老犬がおり心配だったから。携帯で安否を確認するわけにもいかず、また、犬は家の中にいたので、隣の人に覗いてもらうわけにもいかなかった。それで、帰ろうと思いき歩き出した。今思うと本当に無謀だったが、当時は知識もなく、帰宅困難者という言葉も知らず、その危険性なども考えられなかった。結果的に、10 時間以上かけて帰宅し、犬も無事だった。

帰宅困難者の問題や危険についてだが、まず、多くの人が一斉に動くと、さまざまな混乱が予想される。たとえば混雑した道、細い道に、パニック状態の人が大勢押し寄せると、集団転倒が起こる危険性もある。もしどこかで火災が起きていた場合、大変危険な状態になる。また、建物の一部や看板が落ちて当たる危険もある。もう一つの深刻な問題は、救急車、消防車などの緊急車両の活動や通行を妨げてしまうことである。各自治体では「むやみに移動を開始しない」と注意を呼びかけている。そのために、「一時滞在施設」の指定が行われている。それについては、この後のワークショップで詳しく説明をする。

中途失聴・難聴者にとっては、災害時に情報を得ることが大変困難だと聞いた。たとえば避難指示の広報車は音声の案内だけで、難聴の方には聞こえず逃げ遅れてしまったとか。また避難所で、救援物資、食料、防寒具などをどこで配布しているかという情報が聞こえないために、もらい損ねてしまうなど、大事な情報を得られない現状も知り、本当に驚いた。

今後、私たちの活動の中で、聴覚、視覚、肢体などいろいろな障害をもった方々を想定した対策も、きちんと進めていきたいと思った。そういうことに気付く機会を得られて感謝している。簡単だが、私からの説明はここまで。

(1212/2049 文字)

2015（平成27）年度 パソコン実技試験問題（あらすじ）

テーマ「高齢（終活）」

山本／このイベントの主催者で、フリーのジャーナリストの山本です。今日は敬老の日で、「終活」「遺影」などと言うと「縁起でもない！」と叱られてしまいそうだが、元気だからこそ「終活」や「遺影」について明るく話ができると思う。そういう話をするので、10分間お付き合いください。

今日のテーマ「終活」という言葉、ご存じ？ 「終活本」もたくさん出ているが、簡単に言うと、元気なうちに自分の葬儀のやり方、お墓をどうするか、どんな写真を遺影にするか、財産をどうするかなどをきちんと決めて準備し、残された子どもや孫に迷惑をかけないようにするもの。また、最近では自分の思い通りの最期を演出する側面が強いようだ。

「エンディングノート」というのは、最近では結構広まっているようだが、葬儀のやり方や遺影などの項目について整理し書いておくノートのこと。いろいろなタイプが市販されている。今日はこの1階の入口付近の展示コーナーにいろいろなエンディングノートの見本が置いてあり、購入することもできるので、よかったらご覧ください。

私は40代に入ったばかりで、終活はずいぶん先のことのように、まったく実感が持てずにいた。ところが、3年前に父が亡くなり、その経験から終活に興味を持つようになった。フリージャーナリストをしているので、終活についていろいろと調べ、新聞や雑誌に少しずつだが調べたことを書くようになった。父が亡くなった当時、終活の情報をもし知っていれば、もっと気持ちよく、後悔なく、父を見送ることができたのではないかという気持ちもあり、皆さんにはぜひ知ってほしいと思う。父は亡くなる直前まで元気で、本人もまったく予期していなかったと思う。父は一人暮らしで、何をどこにしまってあるのかもわからなかった。中でも、遺影のために、最近撮った写真を探すのは、ずいぶん苦労した。なんとか町内会の団体写真を見つけたが、小さくてピンボケしている父の顔を無理に引き伸ばしたので、さらにぼやけてしまい、親戚から「もうちょっとマシな写真がなかったのか」と言われた。何より、本当に父はこの遺影で良かったのかという疑問が残ってしまった。

遺影は葬儀だけでなく、その後も仏壇に飾り、毎日家族が見るものなので、できればいい写真であってほしい。そのためには、遺影用にプロのカメラマンに撮ってもらうというのも1つの方法。後で詳しく案内するが、今日はプロに撮影してもらえる「遺影撮影会」がある。最近の遺影は、昔の遺影とはかなり変わってきている。以前は白黒が一般的だったが、今はほとんどカラー。きれいなお花で写真の周りを飾ったり、普段着に近い服で、自然な笑顔などの遺影が多くなっている。あらかじめ何枚も撮り、お気に入りの写真を見つけておくのがいい。

「遺影撮影会」をぜひ体験してほしいと思う。この後2時半から、地下1階スタジオで、お一人ずつプロのカメラマンが撮影し、できあがった写真は後からメールで送る。メールができない場合、後日プリントしたものを郵送することもできるが、その場合プリント代と送料をあわせて200円を頂戴している。メールの場合は無料。希望者は、この後整理券を配るので、後ろに立っている赤い腕章をつけた男性スタッフから、整理券と申込用紙を受け取ってください。申込み用紙に名前とメールアドレスを書いて、地下1階スタジオにお持ちください。

終活というと、なんとなく暗いイメージがあるかもしれないが、元気なうちに明るく楽しく準備をしておけば、思い悩むことなく毎日を生き生きと過ごせると思う。私の話はここまで。

(1468/2378 文字)